

2017年2月19日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：マルコの福音書5：1－20

タイトル：「悪霊を追い出すのは誰か」

---

2017年はルターの宗教改革(1517年)から500年という節目の年である。新改訳聖書もこの節目の時に、原文から忠実に再翻訳をし、全面改定したものを今年の9月に出版予定とのことである。

聖書翻訳者の方の話によると、翻訳者として本当の一人前になるには、にわかでは難しく、最低でも20年はかかるそうだ。そのためには莫大な費用もかかる。人を育てるといえるのは本当に大変なことだとつくづく思ったのである。

しかしそれは聖書翻訳だけではなく、様々な職種に言えることであろう。もちろん牧師の仕事もしかりである。人が成長するのは、やはりそれなりの時間とまた経験が必要になってくるのである。

さて、イエスに付き従っていた12弟子たちもまた同じである。

聖書によれば彼らがイエスと過ごしたのはわずか3年ほどであったが、福音書を読んでいくと弟子たちの信仰が次第に成長していったことが本当によく分かる。

さらに12弟子たちは、イエスの復活の後、使徒となり聖霊の助けを頂きながら、なおも成長していった。もちろん時に失敗することもあったようである。例えばペテロについてパウロは、ガラテヤ2章で彼の信仰の姿勢のことを指摘している。また使徒の働きを読んでも、使徒たちが、使徒となってもなお、教会形成に悩みながら成長していたことが分かる。12弟子たちの信仰は、このようにだんだんと成長していったのである。

イエスは12弟子たちと一緒に過ごした地上でのわずか3年ほどの間に、彼らを本当の弟子として立たせる使命があった。

その弟子訓練の中でも有効的だったのは、やはり実際に御業を間近で見せることであった。

本日のマルコの福音書5:1-20もその一つである。

イエスはこの箇所、汚れた霊(15vでは「悪霊」と記されている)を追い出し、弟子たちに御自身の持つ

・・・

ている圧倒的な神の権威をさらに明らかに証された。

これは先のマルコ4:35-41の「嵐を静める」ところでも、イエスが自然を支配していることの中にも見られたことであった。

この時、弟子たちの舟が嵐によって沈みそうになり、彼らはすっかりパニック状態となり、冷静に状況を判断することができなくなっていた。それで、彼らは「おぼれて死にそうだ！(マルコ4:38)」と眠っていたイエスを起こし、助けを求めたのである。

弟子たちにとってイエスとは、起きていないと力を発揮しなく、自分たちを助けてくれない方という思いがあったようだ。

けれども実際のイエスは、この時あえて「眠る」という姿を通して、たとえ嵐の中であっても、まことの神に信頼するなら、すべての災いから必ず救い出されるという「平安」を弟子たちに示していたのである。(参照：詩編3:5-6)

そしてさらにそれは、単なる気休めの「平安」ではなく、目の前の「嵐」そのもの、言い換えれば、私たちが時に悩ます「あらゆる問題」に対しても、イエスというお方は、すべてを支配し、治め、静められる全能の神である！ことを、「黙れ、静まれ(マルコ 4:39)」の言葉によって、弟子たちにははっきりと示されたのである。弟子たちは嵐の中、イエスの言葉と態度を通して、イエス(神)を信頼する本当の信仰体験をしたのである。

さて、この嵐の出来事のあと、イエス御一行は「湖の向こう岸ゲラサ人の地に着いた(5:1)。」共観福音書のルカも同じく「ゲラサ人の地」と記しているが、マタイでは「ガダラ人の地」と記している。また別の写本によれば「ゲルゲサ」ともなっている。実はこの1vの「ゲラサ人の地」とは、明確にどこを指しているのかは、分かっていない。一方、「ゲラサ」という地は、ガリラヤ湖から南東に60kmほど行ったところにある。しかしこれでは文脈的にも話が合わないように思える。遠すぎるのである。また「ガダラ」とは、それよりももっと近く、ガリラヤ湖から10kmほど行ったところである。これなら移動は可能だっただろう。そして「ガダラ」地方の中には、「ケルサ」という場所があるのである。文脈的に考えれば「ゲルゲサ」が一番考えやすく、聖書の巻末の地図でもそこを指しているのだが、断定はできない。おそらく、これらのことを総合的に考えると、ガリラヤ湖東岸の「ゲルゲサ」から「ガダラ」の「ケルサ」あたりまでを、「ゲラサ人の地」と言えるのではないだろうか。イエスたちはその地域に来ていたと考えられる。「こうして彼らは湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。(5:1)」

「イエスが舟から上がられると、すぐに汚れた霊につかれた人が墓場から出てきて、イエスを迎えた。(5:2)」悪霊が「イエスを迎えた」とは、非常に興味深い表現であるが、マタイとルカでは、このところを「イエスに出会った」と記している。「迎える」と「出会う」では印象が随分違う。とにかく、この汚れた霊(悪霊)は、イエスをさけて必死に逃げたというのではなく、むしろ意識して出てきたということが言えるだろう。そしてそれは6節を見ても明らかである。「イエスを遠くから見つけ、駆け寄ってきて・・・」とある。そしてこの汚れた霊(悪霊)は、人間を支配していたのである。

汚れた霊(悪霊)につかれた者の姿と行動は、もはや人間としてはあまりに異常な状態であった(参照:5:3-5)。

一方で、「鎖や足かせにつながれた」ともある。つまり過去には、人々によって何らかの処置をされていた。ということである。しかし人々は、この汚れた霊につかれた者をどうすることもできなくなり、ついにこの者を墓場へと追いやるしか方法がなかったのであった(5:3)。この汚れた霊につかれた者は、本人どころか、周りの人々によってさまざまな対処が試みられたが、決して改善できなく、それどころか取り押さえておくことも出来ないほど絶望的に悲惨な状況だったのである。

9節には、この汚れた霊が「レギオン」という名のものであったことが記されている。「レギオン」とは約6000人からなるローマの軍団名である。すなわち、この汚れた霊の「レギオン」とは、約6000人の軍隊の力を持ってこの人間を支配していた。ということである。これでは、どんなに屈強な者でも、もはや自分で自分の体をコントロールすることは不可能であったことが分かる。

聖書は、病気の者と悪霊による人間の異常行動とを別にしている。それは、はっきりと悪霊というものが存在していることを示しているのである。

そもそも悪霊とはいったい何者か。そしてどんな特質があり、彼らの目的はいったいなんだろうか。新約聖書のユダの手紙6節には、この様に記されている。

「主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。」この箇所によれば、自分のおるべき所を捨てた御使い、すなわち神の命令に意図的に背いている御使いのことを悪魔・悪霊と定義している。またヨハネの福音書8：44では、悪魔の特質についてイエスが次のように語っている。「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」

さらに1ペテロ5：8には、「あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」とある。

そして黙示録12：17では、「すると、竜（サタン）は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者（クリスチャン）たちと戦おうとして出て行った。」と記されている。

聖書はこのように悪魔(サタン)・悪霊とは、「神に逆らい、偽りを愛し、人殺しであり、真理には立っておらず、神の命令を守ろうとする者をほえたける獅子のように探し求めながら歩き回り、戦う」ことを目的としていると者と記しているのである。それが悪魔であり、悪霊である。これは本当の恐ろしいことである。

私たちの周りには、目には見えないが、日夜この悪魔が吠えたける獅子のごとく、食い尽くすべきものを探し求めながら歩き回っていることを本当に警戒しなければならない。

それゆえエペソ6：12には「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」と、聖書ははっきり記している。私達がもし人間関係などで悩み、また試みられたとき、その背後には必ず悪魔の攻撃があることを忘れてはならない！！私達は同じ兄弟姉妹の間に血肉の戦いを決してしてはならないのである！！

さて、汚れた霊(悪霊)につかれた者は、神に造られた人間としての正しい行いではなく、神に逆らうような異常な行動を起こしていた。そして自分の命さえもぞんざいに扱い、ついには命の危険が毎日迫っていたのである。そのように汚れた霊は、神に逆らい続け、この者を苦しめて苦しめて、苦しめ続けたのだが、それなのになぜ、この汚れた霊は「イエスを遠くから見つけて、駆け寄ってきて、イエスを拝し(6v)」たのであろうか？「拝する」とは、「礼拝する」ということである。神に逆らい、偽りを愛する悪霊が、どうしてイエスを拝することができるのだろうか？

すなわち、これこそが「偽りの礼拝」なのである！

悪魔は、実に巧みに物事をごまかし、自分に都合の良いように事を運ぶのである。何故なら悪魔は真理に立っておらず、偽りの父であるからである。ちょうど創世記3章の出来事の通りである。

さらに汚れた霊は、7節で「いと高き神の子、イエスさま。神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください。」とイエスに願っている。汚れた霊は、今まで自分がどれほど人間を苦しめ

て苦しめて、苦しめ続けてきたのか、その反省も自覚もない言葉である。全てが偽りの言葉なのである。そして自分は「苦しめないでください。」とお願いするのである。実に真理から離れている者の姿である。

しかし、なぜ汚れた霊はこんな願いをするのだろうか？

「それはイエスが「汚れた霊よ。この人から出ていけ」と言われたからだ(8v)。」と聖書は記している。

悪魔や悪霊の最後は、ユダの手紙にもあったように、「大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められ」る。ということである。すなわち神による「永遠の裁き」のみが悪魔には待ち受けているのである。それゆえこの汚れた霊は、その「永遠の裁き」に送らないでほしいというのが、この「願い」の狙いであったのである。

では、悪霊はこの先どこに行くことを願い、そしてそこでは何をしようとしているのだろうか？

それこそが、10-13vに記されている出来事である。

「そして、自分たちをこの地方から追い出さないでくださいと懇願した。ところで、その山腹に、豚の大群が飼ってあった。彼らはイエスに願って言った。「私たちが豚の中に送って、彼らに乗り移らせてください。」イエスがそれを許されたので、汚れた霊どもは出て行って、豚に乗り移った。すると、二千匹ほどの豚の群れが、険しいがけを駆け降り、湖へなだれ落ちて、湖におぼれてしまった。」  
汚れた霊(悪霊)は、永遠の裁きに送られる前に、どうしてもこの地方(場所)に居たかったのである。そして彼らの真の狙いである「殺し(ヨハ8:44「悪魔は初めから人殺しである」)」をしたかったのである。これこそが彼らの本心なのである。そしてその標的となったのが「豚」であった。

しかし何ゆえにイエスは、汚れた霊が「豚」に乗り移ることを許されたのだろうか？

人によっては、『キリスト教は動物を殺すことを何とも思っていない。だから信じられない。』という方もいる。

しかし旧約聖書では、人間が罪を犯した時にささげた動物のいけにえとは、罪の重さと共に命の尊さを知るためのものでもあった。また神が天地創造をした時に、この世のすべての生き物を適切に管理するようにと、人間に仕事を与えたのである。それは生き物を殺すことではなく、むしろすべての生き物の命を守り管理することを意味している。それゆえ、神は確かに動物の命をぞんざいには扱ってはいないのである。

では、それなのになぜ、この時は「豚」に乗り移ることを良しとされたのか？

そこには少なくとも3つのことが言えるだろう。

①「命」の責任はすべて神にある。

全ての「命」は神によって創られた。それゆえ真の神であるイエスもまた、豚の「命」の責任をも握っておられるのである。

福音書には、「雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。(マタイ10:29)」と記されている。

つまり、神御自身が豚の「命」の責任を握っているというその事実の中で、この出来事が起こったのである。神こそは必ず「命」の責任を100%取ってくださるという前提なのである。

②悪霊の大きさを人々に明らかにした。のである。

汚れた霊の「レギオン」とは、ローマ6000人の軍隊力である。それがどれほど大きな力であるか、そしてその大きな力が人を押さえつけ狂気にさせていたということを、人々の目に見えるように明らかにされたのである。2000匹の豚はそのために用いられたのである。

③汚れたものの見せしめである。

豚はユダヤ人の間で汚れた存在として忌み嫌われているものの代表である。それゆえユダヤ人であった弟子たちにとって、汚れたものの結末とは、どのようになるかを目に見えてよく学ぶことができただろう。2000匹の豚が険しい崖をものともせず、いっきになだれ落ちて溺れるとは、それは恐ろしい結末であったに違いない。

イエスはこれらのことを通し、「汚れた霊につかれた者」だけではなく、「ゲラサ人の地域の人々」、そしてお供していた「12弟子たち」に対しても、いかに強大な悪霊であっても、それをことごとく**裁き、退かせ、葬ることができる真の神である！**ということを明らかにしたのである。

また、弟子たちにとっては、この地域はまさに異教の地であった。もしかすると訪れることがほとんど無かった地域かもしれない。

しかし、イエスは対岸のカペナウムに居た時から、このゲラサ人地域の汚れた霊につかれた者の苦しみを知っておられ、救い出そうと訪れてくださったのである。弟子たちが行ったことと言えば、ただ嵐に翻弄されているに過ぎなかつただけである。そしてその先に一体何が待っているのかなどは、一切知る由もなかつたのである。イエスの御計画には、一つの狂いもない。全てを見通し、全てを支配し、全ての苦しみから救い出して下さるお方なのである。

もしかすると、この汚れた霊につかれた者とは、私達の姿そのものであったとも言い換えられるのではないだろうか。そしてイエスこそは、その汚れた霊を取り去るために、豚にではなく御自身の体を持って、十字架の上で命を投げ出して救ってくださったのである。

嵐という自然を治め、支配し、そして強大な悪霊をも治め、支配する神であるイエスを、今週も見続ける者とさせていただきたい。

「悪霊を追い出すのは誰か」。それはイエスなのである。

アーメン